平成 25 年 3 月 27 日

東松島復興推進員だより（第13号）

～地を往きて走らず～

東日本大震災の発生から 2 年が過ぎました。全国ニュースでは、政府の補助金や民間の寄付金の減少などにより、活動縮小や撤退を検討している支援団体が増えてきているとの報道があります。

宮城県内においても、同様の流れがあります。一方で、住民自身が立ち上がって復興に取り組んでいく頼もしい姿も多くみられるようになっています。

東松島市では仮設住宅の集会所を利用して、お母さん達の手芸グループで毛糸を用いたアクリルたわし、洗濯バサミを利用した猫型の洗濯バサミネコ「おしゃねこ」、仮設団地のキャラクターになった靴下でつくられる「おのくん」など、各仮設団地で特徴のある手作り品を作成し、「かあちゃんの手仕事マルシェ」が展開されています。

洗濯バサミのおしゃねこ

東松島市のキャラクターイート＆イーナ

また、観光面でも被災地では観光協会などが中心となって、語り部ボランティアを始めています。域外からの来訪者に対して、地元ガイドが被災地域を巡りながら、津波災害の脅威、復興への取り組み等を語ってくれます。仙台市では民間タクシー会社と NPO 団体の協働により語り部タクシーが登場しています。また、宮城県バス協会も被災地を巡るバスツアーの導入を検討しています。

住民は鉄道の完全復旧を願っていますが、鉄道の完全復旧には至っていません。一部では旧鉄道路線を活用したバス専用路線（バス・ラピッド・トランジット（BRT））が導入されているところがあり、バス専用路線が順次延伸されてきています。BRT は地域の足であると共に観光資源にもつながっていくのではないかとの期待もあります。

JICAは復興庁、青年海外協力協会（JOCA）の三者で協力協定を締結し、帰国したボランティア経験者と被災自治体のニーズマッチングを図り、被災自治体に人員の派遣を行っています。3月には第1陣として宮城県女川町、気仙沼市に計3名が派遣されました。また、被災地域外の県・市町からも様々な形で応援職員が派遣されています。東松島市にも東京都大田区や福井市、熊本県人吉市、山鹿市など多くの自治体からの応援職員が復興に向けて共に業務に取り組んでいます。

このような応援職員との繋がりから、県外で被災地をPRする活動なども生まれています。

東京都大田区では3月29日から31日と、東松島市と東急プラザ蒲田の共催で、「んめぇもん　いっぱい！　東松島復興支援マルシェ」が開催されます。
東松島市の名産品、特産品、ゆるキャラなどを通して被災地との繋がりが生まれて行きます。

震災から2年を経て、東松島市社会福祉協議会は継続して活動をしている34団体に対し、感謝状を授与しました。復興感謝祭として地元の方々が地元食材を利用して作った炊き出しで支援者に感謝を伝えると共に、交流の場となりました。

JICAは発災直後の矢本第一中学校の避難所支援に一時退避中のボランティアを派遣して以降、地域復興推進員の配置を行うと共に、インド洋大津波で被災したインドネシア国との相互復興に向けた支援を行っています。

このように、被災地では引き続き支援団体や、応援自治体職員、民間企業、住民など関係者が一丸となって取り組んでいます。皆さんも、被災地の復興に関心を持ち続け、応援をお願いします。

復興感謝祭での太鼓の演奏

感謝状の授与

【大田区ホームページ】
http://www.city.ota.tokyo.jp/shinsai/shien/250322hukkoushienmarushe.html

【おのくん公式HP】
http://socialimagine.wix.com/onokun#

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】
http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html

以上

＊＊

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。

＊＊